

令和 3 年 6 月 22 日現在

機関番号：32629

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K03570

研究課題名(和文) オットー・キルヒハイマーの政治思想と「包括政党」テーゼの再検討

研究課題名(英文) Otto Kirchheimer and the "catch-all party"

研究代表者

野口 雅弘 (Noguchi, Masahiro)

成蹊大学・法学部・教授

研究者番号：50453973

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：「包括政党」(キャッチ・オール・パーティ)の概念で知られる政治学者オットー・キルヒハイマーの政治思想を、多角的に検討した。成果は以下の4点である。

1) キルヒハイマーは亡命中のアメリカで「戦略情報局」(OSS)に勤務し、ノイマンとマルクーゼらとともに「ナチ・ドイツ秘密レポート」を執筆した。私はこのレポートを翻訳し、彼らの戦後構想を明らかにした。2) カール・シュミットの影響という観点から、私は「包括政党」テーゼの成立過程を明らかにした。3) 包括政党とテクノクラシーの関係を考察し、『村度と官僚制の政治学』を執筆した。4) この視点から、ウェーバーの官僚制論を再検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

オットー・キルヒハイマーがノイマンやマルクーゼとともに書いた『ナチ・ドイツ秘密レポート』を翻訳し、彼らの戦後構想を検討し、またカール・シュミットとの知的交流をたどることで、キルヒハイマーが「包括政党」(キャッチ・オール・パーティ)テーゼを形成する過程を明らかにした。「包括政党」はテクノクラシーと親和的で、野党の衰退につながる。この連関と問題を示したことが本研究の成果である。

研究成果の概要(英文)：I examined the political thought of Otto Kirchheimer, who is known for the concept of the "catch-all party". The results of the research are the following four points.

1) Kirchheimer worked for the Office of Strategic Services (OSS) in exile in the USA and wrote the "Secret Reports on Nazi Germany" with Neumann and Marcuse. I translated this report into Japanese and pondered their vision of post-war Germany. 2) From the perspective of Carl Schmitt's influence, I examined the development process of the "catch-all party" thesis. 3) Considering the relationship between catch-all party and technocracy, I wrote "Sontaku and Bureaucracy". 4) From this point of view, Weber's bureaucracy theory was re-examined.

研究分野：政治学

キーワード：包括政党 キャッチ・オール・パーティ オットー・キルヒハイマー テクノクラシー カール・シュミット 官僚制 OSS 村度

1. 研究開始当初の背景

当初の研究背景は主として以下の2点である。

1つ目の背景は、政党政治の危機、なかでも「野党の衰退」という課題に対して、政治学的な考察が必要とされていることである。もちろん各国の政党および政党政治についての実証的な研究は進んでいる。これに対して政治思想・理論の領域で、政党政治についての研究はそれほど多くはない。近年のデモクラシー論としては、熟議やロトクラシーへの関心は高い。このことは、政党政治という既成のルートへの不信と諦めが増大していることを意味している。こうしたなか、政治思想史の分野の研究者として、政党を対象とした理論を再検討することで何らかの貢献ができないかと考えた。

具体的には、オットー・キルヒハイマー (Otto Kirchheimer, 1905-1965) の「包括政党」(キャッチ・オール・パーティ) テーゼに注目することにした。このテーゼは、「野党の衰退」とコインの裏表にある。この有名なテーゼの成立を、カール・シュミットやフランクフルト学派との関連で再検討しようと考えた。

2点目は、キルヒハイマーに関する新しい資料が刊行されたことである。戦争中にアメリカで、キルヒハイマーらによって執筆された Secret Reports on Nazi Germany: The Frankfurt School Contribution to the War Effort が 2013 年に書籍化され、その後この資料のドイツ語訳も刊行された。後者の序文を執筆したのは、フランクフルト学派のアクセル・ホネットだった。このことはこの資料の重要性を示している。

これに加えてドイツでは、これまで散逸していたキルヒハイマーの業績をまとめるべく、ドイツ研究振興協会 DFG の支援によって、ドイツ語版のキルヒハイマー著作集 (Otto Kirchheimer - Gesammelte Schriften) の刊行が始まった (この著作集は全 5 巻で、この科研の期間に完了した)。このため、キルヒハイマー研究の前提が整った。

2. 研究の目的

オットー・キルヒハイマーの「包括政党」(キャッチ・オール・パーティ) テーゼの成立をたどることで、2つの目的が達成できると考えた。

1つは、「野党の衰退」という現象を説明する理論を提示し、権威主義の台頭に対抗する理論を構築することである。野党、ないしオポジションの衰退は別の言い方をすれば、権威主義の台頭でもある。近年、選挙は行われているが、対抗的なメディアや野党に対して抑圧的な「競争的権威主義」の問題に注目が集まっている。本研究が試みたのは、亡命知識人の政治学者キルヒハイマーの研究を検討することを通じて、近年の権威主義研究に貢献することであった。

第2点は、これまであまり注目されてこなかったフランクフルト学派非主流派のオットー・キルヒハイマー、フランツ・ノイマンらの政治理論に注目し、その詳細と意義を検討することである。ノイマンはナチ・レジームについての古典的研究『ピヒモス』を執筆したことで知られている。今日、権威主義の台頭がいわれるなかで、ナチ・レジームについて考察した彼らの知見は再検討するに値すると考えられる。

3. 研究の方法

あらたに刊行されたオットー・キルヒハイマーらフランクフルト学派のメンバーによるナチズム分析である『ナチ・ドイツ秘密レポート』を翻訳し読解する。

あらたに刊行されたオットー・キルヒハイマー著作集を中心に、これまでさまざまな分野で断片的に論じられてきたキルヒハイマーのオリジナル・テキストを体系的に読解し考察する。

オットー・キルヒハイマー著作集の編纂を担当しているヘルベルトゥス・ブーフシュタイン教授 (グライフスヴァルト大学)、ケーテ・ハンブルガー研究所「文化としての法」所長のヴェルナー・ゲプハルト教授 (ボン大学) らと連絡を取りつつ研究を進める。ニューヨーク州立大学オールバニ校図書館の「キルヒハイマー・ペーパーズ」など、図書館、資料館に出向いて、基礎的な資料を渉猟する (海外での調査は、コロナ禍などのために十分できなかった)。

4. 研究成果

研究成果は以下の4点である。

まず、ノイマン、マルクーゼ、キルヒハイマーらによって執筆された『ナチ・ドイツ秘密レポート』(みすず書房、2019年) を日本語に翻訳して刊行した。彼らのレポートのテーマは多岐に及ぶ。しかし当初の予想以上に、政党についての考察に多くのページを割いていることがわかっ

た。とくに社会民主党、そしてドイツ共産党、そしてナチ時代に地下に潜った諸派である。彼らが政党・党派の分析に力を入れたのは、オポジション(対抗、反対派、野党)の再建が彼らの戦後構想の重要な柱だったからであった。

なお、このレポートが執筆されたのは「戦略情報局」(OSS)だった。ここは、象徴天皇制など、日本の占領政策についてもレポートを書いている。今回のナチ・ドイツ秘密レポートの翻訳は、日独の「戦後」について考える資料としても、一定の貢献になったと考える。

2点目は、カール・シュミットとオットー・キルヒハイマーの思想的な関係を明らかにすることができた。シュミットは「治者と被治者の同一性」というルソー的なデモクラシー理解から出発することで、政党間の競争や自由主義的なコーポラティズムに否定的な態度をとった。これに対してキルヒハイマーは政党に積極的な意味を付与した。ただし、キルヒハイマーは、政党が「包括政党」化し、友・敵関係(「政治的なもの」)が喪失することには危機感をもちた。こうして生まれたのが「包括政党」テーゼだった。このテーゼはシュミットとキルヒハイマーの緊張的な対話の成果であるといえる。

近年、刊行されたカール・シュミットの日記などから、戦後もキルヒハイマーとシュミットの交流は続いていたことがわかった。「包括政党」(キャッチ・オール・パーティ)テーゼについても、シュミットは肯定的に言及している。かつての師弟相互の言及は明示的であったり、仄めかしだったりする。いずれにしてもシュミットとキルヒハイマーの間の緊張をおびた交流は、これまでの政党研究では完全に見逃されてきた。この関係に光を当て、政党政治の政治思想的考察の一つの基盤を明らかにすることができたことは、本研究の一つの成果である。

この関連の成果については、2019年度の日本政治学会の全体シンポジウムでの報告「1932年のカール・シュミット」、および「包括政党」以前のオットー・キルヒハイマー 政治科学者の政党研究と政治思想研究者の政党研究」(『思想』、2019年7月)などで発表した。

3点目として、「包括政党」とテクノクラシーの内的関連を明らかにした。キルヒハイマーが「包括政党」論で危惧したことは、1966年のキージנגガー政権の成立によっていっそう明確になった。キリスト教民主同盟・社会同盟(CDU/CSU)とドイツ社会民主党(SPD)の大連立によって成立したキージングガー政権は連邦議会でも9割を占める巨大与党を出現させた。

ユルゲン・ハーバーマスが『後期資本主義のレジティメーションの問題』(1973年)で指摘したように、この時期、統治の脱政治化が進み、テクノクラシー的な手法が広がる。官僚主導のテクノクラシーというよりは、政治主導で脱政治化とテクノクラシー的なスタイルの統治が行われた。

野党の弱体化とテクノクラシー的統治の関連は、今日の日本政治を考えるうえでも示唆的である。「忖度」はある意味でとても日本的な言葉であるが、こうした連関におくことで説明可能となる。こうした考察をしたのが、『忖度と官僚制の政治学』(青土社、2018年)である。

最後に、第3点目と関連して、キルヒハイマーと「キャッチ・オール・パーティ」の研究に関連して、マックス・ウェーバーの官僚制論についてのいくつかの文章を書いた。『忖度と官僚制の政治学』で用いた「中立的なものこそ政治的である」というのが、このときの中心的なテーゼである。

ウェーバーについては、『職業としての学問』と『職業としての政治』の新訳を『仕事としての学問 仕事としての政治』(講談社学術文庫、2018年)として刊行した。またウェーバー没後100年の2020年に、『マックス・ウェーバー 近代と格闘した思想家』(中公新書、2020年)を上梓した。そして『現代思想』のマックス・ウェーバー特集号(2020年12月)に寄稿した「官僚たちのマックス・ウェーバー」、および重田園江との対談「フーコー vs. ウェーバー」でも官僚制と統治の問題を論じた。これらはすべてキルヒハイマー研究と同時並行に取り組んだ研究であり、キルヒハイマーと「包括政党」について考察することなくしては、このような形ではなされえなかったと思う。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 野口雅弘	4. 巻 1143
2. 論文標題 「包括政党」以前のオットー・キルヒハイマー 政治科学者の政党研究と政治思想研究者の政党研究	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 思想	6. 最初と最後の頁 63-81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 野口雅弘	4. 巻 88
2. 論文標題 比例代表制をめぐるウェーバーとケルゼン：「政治空白」という用語について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 成蹊法学	6. 最初と最後の頁 39-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 野口雅弘	4. 巻 217
2. 論文標題 「なんちゃらファースト」と悪	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 シノドス	6. 最初と最後の頁 3-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 2件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 野口雅弘
2. 発表標題 1932年のカール・シュミット
3. 学会等名 日本政治学会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 野口雅弘
2. 発表標題 カール・シュミットの呪縛 「包括政党」catch-all partyの政治思想史
3. 学会等名 成蹊大学政治学研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 野口雅弘
2. 発表標題 政治(科)学者の政党研究と政治思想史研究者の政党(・党派)研究 オットー・キルヒハイマーを題材にして
3. 学会等名 日本政治学会(招待講演)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 フランツ・ノイマン、ヘルベルト。マルクーゼ、オットー・キルヒハイマー、翻訳：野口雅弘	4. 発行年 2019年
2. 出版社 みすず書房	5. 総ページ数 456
3. 書名 フランクフルト学派のナチ・ドイツ秘密レポート	

1. 著者名 マックス・ウェーバー	4. 発行年 2018年
2. 出版社 講談社	5. 総ページ数 232
3. 書名 仕事としての学問 仕事としての政治	

1. 著者名 野口雅弘	4. 発行年 2018年
2. 出版社 青土社	5. 総ページ数 304
3. 書名 忖度と官僚制の政治学	

1. 著者名 成蹊大学法学部	4. 発行年 2019年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 366
3. 書名 教養としての政治学入門	

1. 著者名 Masahiro Noguchi	4. 発行年 2017年
2. 出版社 Vittorio Klostermann	5. 総ページ数 542
3. 書名 Recht als Kultur? Beitrage zu Max Webers Soziologie des Rechts	

1. 著者名 野口雅弘	4. 発行年 2020年
2. 出版社 中央公論新社	5. 総ページ数 276
3. 書名 マックス・ウェーバー 近代と格闘した思想家	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------